

甘くて苦い、 収集の思い出

小長谷 有紀 (ながやき)

研究戦略センター

特別展「大モンゴル展」の 企画開始

展示の方法は企画によって多様にありうるけれども、準備のために十分な時間があることは、



大モンゴル展の全体風景。資料を収集するほかに、映像資料も作成した



展示場のゲル内部。一日館長となった旭嵐山は「おばあちゃんの家に戻ったみたい」と感想をもらした

どんな企画にとつても悪いことではないだろう。一九九八年に実施された「大モンゴル展」の場台、およそ五年の準備期間を要した。展示の五年前に提出した企画書には、一九九五年、九六年、九七年の三年間にわたる収集計画を記載しておいた。当時、モンゴル国は民主化の波を受け

て市場経済へと急激に移行し、社会全体として混乱していたから、一度に多額の外資を持参して大量に文物を買付けけることは、現地の経済活動とつりわけ文化をめぐめる経済に対して致命的な破壊力をもたらすのではないかと危惧された。それゆえに、少しずつ確実に集めて蓄積するという戦略を立てたのである。

現地の経済環境がすっかり変化してしまっただけから見ると、いかにも遠い昔の出来事のように思われる。あの当時の収集活動を思い出して、不思議な甘さといくばくかのほろ苦さをも一度味わってみよう。

映画撮影所に舞う雪

一年目はゲルとよばれる移動式住居を内装品とともに一式まるごと買い付けることに焦点を当てた。当初の段階での最大の難関は、三年後の展示であることの説明で、激変する社会に生きる人びとにとって、今日の話こそが必要とされているのに、三年先のために一年後に引き取りに来るといふ話をするわたしは、まるで宇宙人であつたに違いない。

さいわい現地の歴史博物館の元館長であり、民博客員教員であつたルタバズレン氏の協力を得て、内装品一式のリストを作成し、事前に発送することができた。つまり、わたしは収集さ

れたものを引き取りに行けばよいだけなのだった。

くだんの住居一式はウランバートル市の東方にある映画撮影所の一角に集められていた。一部は映画で使われていたセットであり、一部には収集に参加してくださつた方がたの持参品もあつた。そうしたモノの由来をできるだけ詳しく、民博特製のカードに記録してゆく。

「伝統的」であることを表わすために、博物館はしばしば「古き」を演出する、と往々にして批判されがちである。しかし、カードに記入していると、本当にモノたちには「古き」が宿つていることも確かに了解される。何しろ、家族の思い出が詰まつていて、まさに現在を生きる人にとつての過去がそのまま手渡されてくるのだから。「ああ、それ、おれんちにあつたやつ、もういまさき買おうと思つても見あたらないうなあ。まだ暑い八月の野外での作業だつたのに、突然、寒波に見舞われ、雪の舞うなかでの作業となつた。手がかじかんてんがもてない。革製のジャンパーと、毛糸のフワラと手袋を借り、全身の防寒対策をして作業を続けた。思えば、突然に気象が変わるのはモンゴルの常だから、調査に出るたびに毎回、服を現地借用してきたよいうな気がする。

許可書の入手

ようやく整理が終わわり、いよいよ国外搬出の手続きとなる。当時は古いゲル一式をもち出すにも木工業界の許可が必要であつた。もちろん古い品物なので、本来なら、現代の業界とはな

ら関係がないにもかかわらず、その証明書がなければ、通関の許可が下りなかつた。なんとも理不尽に思われたが、理詰めで当たつても解決しそうにない。

そんなとき、尽力してくださつたのは、モンゴルの偉大な国民作家S・エゼルネ氏である。彼は、普段身につけない熱帯を胸にこれみよがしにつけて木工業界のオフィスに現れた。彼屋の扉はなかなか開かない。ようやく開くと、部屋はまず普及の内ポケットから白い封筒を取り出し、「これが私の名刺だ」と言つて事務員らしき人に手渡した。それから彼だけが引き入れられ、戻て来たときには書類にサインがしてあつた。

おそらく、彼の名刺とはモンゴル語でいうところの「緑色のもの」であつたろう。何ドル札であつたかを説明する代わりに、彼は言った。「馬乳酒を飲んで、タルバガンを食べたいやがる」と。そう、オフイスではちやうど、行く夏を惜しんで馬乳酒を飲み、来る秋に先んじて越冬前の小太りにした草原マーマットの肉に舌鼓を打っていたのである。

一件落着いてから、お世話になつた人びとのお礼を兼ねて、わたしもささやかな宴を催した。ただし、タルバガンを手入する見込みはない。わたしはただ酔い覚ましに子ども公園のなかを、タルバガンの像に向かつてからがら散歩した。「こんな動物の像を立てるなんて世界でモンゴルだけだろ？」とエゼルネ氏はこぼれながら笑つてから、「ユキ、これからも困つたことがあつたら言いなさい。助けてあげよう。だけど、あと五年の間だよ」と。そして、その宣言と折り、彼は二〇〇〇年五月に他界した。こゝ冥福を祈る。

ゲルを収集した翌年(1996年)には、民族衣装を中心に収集し、その収集風景を収めた映像資料も撮影されていた



モンゴルの国民作家
S.エルデネ氏。展示
期間中に招聘し、講
演を依頼した



早秋、狩猟が解禁されると、人びとは銃砲をかついでタルバガンを求めて野に出る



子ども公園のなかにあるタルバガン像。近年、らくがきがひどくなつていく